

世界の学校

* エクアドル・グアヤキル

偉人・野口英世の精神継承

南米エクアドルの最大都市グアヤキルには、千円札の肖像画にもなっている細菌学者・野口英世（1876～1928年）の名を冠した公立学校がある。

「ヒデオ・ノグチは何をした人かな」

4～18歳の約880人が在籍する「ヒデオ・ノグチ学校」の低学年の教室で、エドアルド・ロシージョ校長（60）が問いかけた。小さな手が次々と挙がる中、児童の一人が指名を待たずに大きな声で答えた。

「黄熱病の研究をした人です」



梅毒の研究などでノーベル賞候補にもなっていた野口英世。野口は1918年、ロックフェラー医学研究所の研究員として、当時中南米で猛威をふるっていた黄熱病を撲滅するため、この地を訪れた。突き止めたと発表した黄熱病の病原性は、後に別の感染症の

校名に冠し辛苦しのぶ

ものと判明するが、感染の危険を顧みずに研究・治療に没頭した野口は、今もエクアドルの英雄としてたたえられている。

グアヤキルでは、多くの公立校が偉人の名を冠しており、子どもたちは、日頃から校名となった偉人について学んでいる。

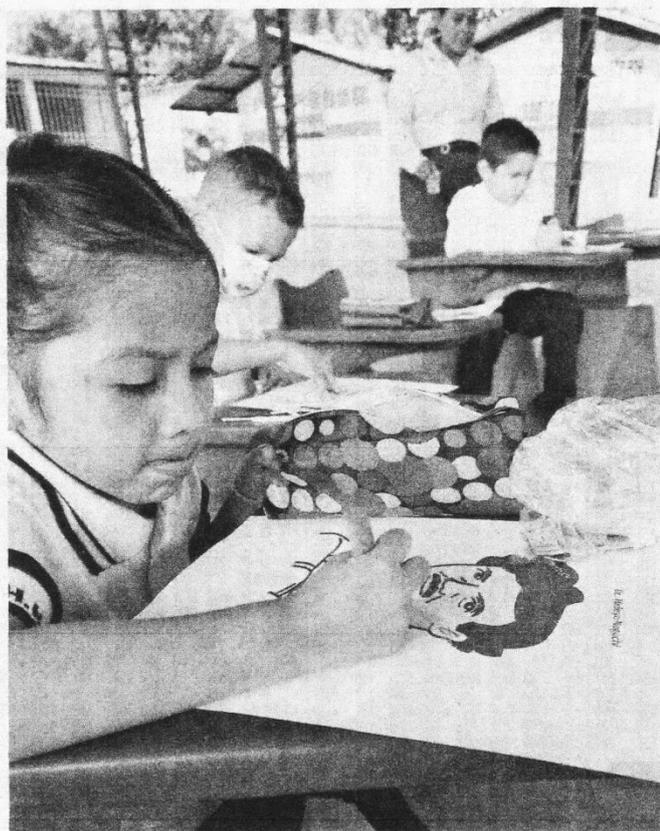
ヒデオ・ノグチ学校は、二つの学校の合併を機に2013年に名付けられた。同校の教室には児童らが色を塗った野口の似顔絵や、生涯や功績を調べた資料が掲示されている。児童たちは、野口が貧しい農家の出身で、必死に勉強して医者になったことや、幼少期に左手が癒着する大やけどを負ったことも知っている。

この日は、校庭で野口に関するスピーチが行われ、ヨハン・

パラレス君（11）が「ノグチの足跡を知ること、勉強への意欲が湧く」と述べた。アリアナ・ラミレスさん（11）は「手が不自由でも、ノグチは夢をかなえるために努力をした。私も医師になって、人を助けたい」と目を輝かせた。

新型コロナウイルスの影響で、同校は20年3月から2年3か月間、対面での授業が行えなかった。貧しい家庭ではインターネット環境がなく、オンライン授業が受けられなかった児童もいた。そんな児童たちも、貧しさや障害などの困難に負けなかった野口に自身を重ね、勉強に励んでいるという。

ロシージョ校長は「人は安定を求めるものだが、ノグチは勇気を持って世界で活躍した。子どもたちには、その精神を受け継いでほしい」と期待している。（グアヤキル 淵上隆修、写真も）



野口英世の似顔絵に色を塗る児童（7月18日、エクアドル・グアヤキルで）

野口英世は、黄熱病研究のため、中南米の各国に足を運んでおり、現地で功績がたたえられている。

野口が1920年に訪れたメキシコのメリダ市では、研究拠点としたユカタン自治大構内に「野口英世博士地域研究センター」が設けられ、今も感染症の研究が続けられている。

同年に出張したペルーでも、首都リマの貧困地区に私立学校「野口英世学園」が設立された。ただ、現在は資金難で休校している。

23年に派遣されたブラジルでは、リオデジャネイロに「野口博士通り」があり、

サルバドルの研究施設では、野口が使用した実験器具が今も大切に保管されている。

メキシコなど各地にも足跡